

② 話しことばの世代差 — 終助詞、副詞を中心に —

三井 昭子

— はじめに —

話しことばの特徴として、「文が比較的短い」「文の順序が正常でない場合がある」「同じ文やことばをくりかえすことがある」「言いさして文を終わることがある」「指示語が多くつかわれる」「文の成分の一部を省略することがある」「敬語がいつもついてまわる」「終助詞、間投詞がよく使われる」「漢語を使うことが比較的少ない」などが指摘されている。(注1) また、このほかにも「助詞の脱落」「語の縮約」「話しことばの語彙の使用」などもあげられている。(注2) ここでは世代差という観点から、S家のK、C、M3人のことばを対象とし、特に世代間で使用に差が見られるものにしぼって考察していくことにする。

1. 応答詞

「はい」「ええ」「うん」

「はい」は80代のKで4例、50代のCで5例、20代のM2例となっており、絶対数は多くない。家族同士の受け答えでは使われない。ここでは、司会者に対する応答に使われたものである。

「ええ」K12例、対全文数比7%、C例対全文数比2.6%、Mは0である。

「うん」K6例、C14例、M17例となっており、このような家族を主とした座談の場での母のC、娘Mの肯定の応答詞は「うん」が主流であることがわかる。祖母は「ええ」を最も多く使っている。

否定の応答詞はほとんど使われておらず、「いや」をK2例、C1例、M2例使用しているのみであった。否定の応答詞の使われ方の少なさは「ことば」10・11号でも指摘されている。

〈表1 応答詞の使われ方〉

	はい	ええ		うん		いや
	使用数	使用数	対全文数比	使用数	対全文数比	使用数
K	4	13	7 %	6	3.4 %	2
C	5	7	2.6 %	14	5.2 %	1
M	0	0	0 %	17	9 %	2

2. 終助詞、間投助詞

2-1 「ね」「ねえ」

終助詞、間投助詞の「ね」は、各世代ともに絶対数としては助詞のなかで最も多く使われており、これは「ことば」10、11号におけるインタビューを資料とした結果と一致している。対全文数比でK32%、C26.6%、M8.5%となり、80代のKが最も多く使っている。「ね」は相手に同意を求める言い方として使われ、丁寧さのある助詞とされている。「ことば」11号で「年輩の人ほど『ね』を多用している」（注3）と述べているが、ここでも同様の結果を示している。前接している文体を見ると、Kが常体比74.5%、C66.7%、M62.5%で世代による差はあまりないが、年齢が高いほど常体比が高く、「ね」の前接文の丁寧さは若い人のほうが高いことがわかる。

つぎに「ね」が長音化した「ねえ」を見ると、同じく対全文数比でK16.9%、C17.7%、M7.4%となり、「ね」とちがって50代のCが最も多く使っている。使用数ではKの29例に対し、Cは48例とかなり差がある。「ねえ」は「ね」と比べるとよりくだけた感じがする。前後の文体を調べると、Cは敬体を58.8%も使い「ね」よりも敬体の比率が高い。敬体を使いながら、よりくだけた「ねえ」でしめくくり、バランスを取る意識が働いているともみられる。

2-2 「よ」「よね（え）」

つぎに「よ」を見てみよう。対全文数比でK4.7%、C3.6%、M7.4%となり、20代のMの多さが目立っている。「よ」は話し手の主張や気持ちを相手に伝える役割をする助詞であり、「ね」よりも自己主張の程度が高いとされている。「ね」をあまり使わない若い世代が好んで使う助詞であると言える。前接の文体を見ると、Mは敬体を15.4%しか使っておらず、他の世代に比べてきわだって少ない。Mは、

ことばづかいに対していわれた時期もあったよ。(262M01)

うん、一緒にたべようよ、とか一緒にたべる？とかそんな感じですかね。
(193M01)

でも男の人でもおんなじよー、わたし、ほんとうに。(394M01)

のような言い方を多用しているのである。

次に「よ」に「ね(え)」がついた「よね(え)」を見る。対全文数比で K4.7%、C10%、M13.2%となり、やはり20代のMの使用率が最も高い。しかも前接の文体がCは敬体が85.2%なのに対し、Mは常体が83.3%である。

でも、おねえちゃんとはあまりいわないよね。(128M01)

(前略) やっぱ、おかあさんが言葉がかわるよね。(178M01)

のようなMの言い方に対し、Cの場合は

あたしが子供にたいする言葉づかいと(中略) やっぱりちがうとおもう
んですよね。(215C01)

だいたい同等ですよねえ。(250C01)

というような言い方が多くなっているのである。これは先述した「ね」で若い世代のほうが前接文の丁寧さが高かったのと対照的な現象で、20代のMは「ね」の前接文は敬体を多く使い、「よ」の前接文は「常体」を使うという使い分けを行っていることを示している。

2-3 「な(あ)」「かなあ」

50代のCが常体とともに使っている場合がほとんどである。

柔らかな雰囲気のごう口調ってのが割合うちはすくないなとおもいます
ね。(382C01)

職業的っていうか、なんかそういう感じの話し方じゃないかなあと思っ
て。(633C01)

いずれも、文末か引用文の文末にきて、詠嘆や感動、自分自身に対する問いかけを表している。「な」「かなあ」がおもに男性が使うという説は「ことば」10、11号で否定されているが(注4)ここでも数は少ないが、各年代の女性が使っており、「ことば」10、11号の結果を裏付けている。

(前略) お父さんの肩にこうくっついちゃうんです。ありゃあ不思議だ
なあ。(236K05)

時代がちがってきたなっていう感じですね。(636K01)

きびしいことばのしつけを受け、きちんとした、丁寧なことばを使う祖母
Kも上のように使っていることから男性専用とは言えないようである。

2-4 「わ」「わね(え)」「わよ(ね)」

「わ」はKが3例のみ、「わね(え)」はKが22例、対全文数比12.8%、
Cが19例、7%、Mは0である。「わよね」はKが4例、Cが6例使用して
いる。いずれも常体に接続している。女性に特有とされる終助詞であるが、

年代が下がるにつれて減少し、20代のMは0というのは注目される。

2-5 「かしら」

Kが3例、Mが0であるのに対し、Cが27例、対全文数比10%と高いのが注目される。この助詞も女性専用とされていたが、「ことば」10・11号の調査結果では使用例が非常に少なかった。この資料で50代のCがかなり多用しているのは、家族との座談という内輪的雰囲気も影響しているだろうが、80代のKがわずか3例で50代のCが27例と多用しているのはなぜかと疑問がわいてくる。「かしら」という語の素性、歴史的推移などを知りたいものである。この資料のなかで、20代のMが女ことばの例として「かしら」を取り上げ、「なにになにかしらとか言って、ああ絶対に言えない（笑い）」と述べている。女ことばの代表として、若い世代に敬遠され、公的な場でもあまり用いられなくなっている「かしら」について更に調査が必要であろう。

(前略) そういうふうにいるところが、やっぱし女らしくないのかしら。
(365C01)

智恵子って、よぶかしらねえ。(142C02)

(前略) なんていったらいいのかしら。(225C01)

<表2 終助詞・間投助詞の使われ方>

	ね			ねえ			よ			よね(え)		
	使用数	対全文 数 比	常体比	使用数	対全文 数 比	常体比	使用数	対全文 数 比	常体比	使用数	対全文 数 比	常体比
K	55	32 %	74.5%	29	16.9%	62.0%	8	4.7%	14.3%	6	3.4%	66.7%
C	72	26.6%	66.7%	48	17.7%	58.8%	10	3.6%	14.8%	27	10.0%	14.8%
M	15	7.9%	62.5%	14	7.4%	71.4%	14	7.4%	84.0%	24	12.7%	83.3%

	な	なあ	かなあ	わ		わね(え)		わよ		かしら	
	使用数	使用数	使用数	使用数	対全文 数 比	使用数	対全文 数 比	使用数	対全文 数 比	使用数	対全文 数 比
K	1	3	0	3	1.7%	22	12.8%	4	2.3%	3	1.7%
C	5	4	12	0	0	19	7.0%	6	2.2%	27	10.0%
M	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0

3. 副詞

3-1 「なんか」

若い世代が多用するとされている「なんか」であるが、50代のCも対全文数比11.8%とかなり使っており、20代のMの14.8%に迫っている。使用数では32例のCが28例のMを超えている。80代のKは3例と少ない。

なんか子供と一緒にたべますかという感じになるんじゃない？(178M02)

もう、なんか、あんまり敬語とかあんまりつかわない。(184M02)

おとうさんになんか、ね、なんか、なにになして頂いてとかいう感じでいわない？(209M03)

(前略) こうしなきゃいけないとかってことは、なんかうちの子はしつけが悪いせいかわみられませんね。(248C01)

電話聞いてて、なんか男だか女だかわからないような言葉づかいですよね。(277C03)

(前略) なんかやっぱし目上の人にたいしては名前をよぶってのは失礼なんだなとおもったことありましたけども。(312C08)

〈表3. 「なんか」「すごい」「すごく」の使われ方〉

	なんか		すごい		すごく
	使用数	対全文数比	使用数	対全文数比	使用数
K	3	1.7 %	0	0 %	1
C	32	11.8 %	3	1.1 %	3
M	28	14.8 %	12	6.3 %	1

20代のMと50代のCの使い方を比べてみると、Cの場合は「なんかー見られませんね」「なんかーわからないような」「なんかー失礼なんだな」と一応、呼応があることが認められるが、Mの場合は、一見無秩序にも思えるように文と文の間に合いの手のように入り、表現をやわらげたり文に調子をつ

けたりする独特の使い方になっている。ものごとをぼかす働きをする助詞「とか」と共に使われることが多い点も特徴である。

3-2 「すごい」

これは20代のMが12例と最も多い。

てめえとかいうのがすうごいはやってえ(346M02)

いまつかうと、すごい汚いみたいな(346M03)

あの大学はすごい言葉とかみんな丁寧だし、一番、自分もすごい、大学に入ってからすごく話すのとかも、すごいゆっくりになっちゃったし、なんか、かわっ・かわりました。(491M02)

50代のCが3例、80代のKは0である。「すごい」の連用形「すごく」がK 1例、C 3例、M 1例と使用例も少なく、世代差もあまりないのに対し、「すごい」は若者ことばとして、ひんぱんに使われている。言うまでもなく動詞や形容詞などの用言を修飾する場合は、「すごく」を使うのが当然で、「すごい」を使うのは規範からはずれることになる。なぜ「すごい」が好まれるのか？従来の規範からはずれた破格の用法の持つインパクトやエネルギーにひかれてのことなのか、子音の語尾よりも母音の語尾のほうが、音声的にひろがりを感じられるからなのか、連用形の後に続く形よりも、いったん切れた形のほうが強い感じになるからなのか、形容詞というよりも副詞という意識なのか理由は判然としない。

— おわりに —

以上、世代差が特に目立っているものを取り上げてみてきた。このほかにも、常体、敬体の使われ方、敬語の使用状況、「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」「とか」の使用実態など興味のある問題は数多くあるが、次回にゆずりたい。

きびしいことばのしつけを受け、正統的な美しい日本語を使いこなせる祖母のMが、変化しつつあることばの世代にかこまれながら、ことばの形的な要素に対しては超越した心境になり、孫が「おばあちゃん、おはよー」とい

ってくれることに対し「ああ、いい孫をもったなあ」と幸福感に浸るというエピソードや「ことばで今どうこうじゃないわね」と語っているのは「形よりも心」という人間の言語観の究極の姿を表しているといえよう。

ことばづかいに対して、あまり自信のない母は上の世代に対しては若干の劣等感をいだき、一方、娘へのことばのしつけを放棄したわけではなく、成長を見守りつつ、注意も与えてきたということのようである。

娘も複雑である。男性と対等に意見を交わしていかなければならない時代に、女性ことばを武器にするようなことは絶対にできないと言いながら、子供には「女ことばとかやっぱり使わせたいと思ってしまうかもしれない」と述べている。また、既成のことばに反発しながら、まだ自分自身の文体を獲得できないでいることもうかがえる。それは、将来、日本語教師として日本語を教えるとき、学習者に教える日本語と自分が使う日本語にギャップができるのではないかという不安を持っていることにも表れている。確かに「なんか」「すごい」「とか」など感覚的なことばを多用する若者ことばが「男性と対等に意見をかわしていく」のに有効なことばであるかどうかは疑問である。TPOを心得て使い分けるかしこさは認めるにしてもである。女性であることを武器にするような女性ことばを拒否する潔癖さが、論理性の追求や、知的で理想的な議論に耐え得るような日本語の構築へと進むことを期待してこの稿を終わりたい。

(注1) 「日本語教育事典」 308P 「話し言葉・書き言葉」の項の
中村通夫氏の説明

(注2) 「日本語学」 1988年3月号
遠藤織枝「話しことばと書きことば—その使い分けの基準を考える」

(注3) 「ことば」11号 共同研究「男性の話しことば」
韓 先熙「応答詞と終助詞からわかること」

(注4) 同 上